

2017年11月25日
つづき図書館ファン倶楽部が呼び
掛けて、実行委員会スタート!

走らせよう! つづきブックカフェ



2018年9月15日
「タウンセンター子育て地藏まつり」
ブックカフェ初登場~!



絵本を積んだ車がみなさんの住んでいるところに行つて、そこで3時間のブックカフェを開きます。絵本を読んだり、紙芝居をしたり、おしゃべりをしたり。コーヒーやお茶の用意もします。世代を超えた交流が生まれ、このまちがもっと元気になる! 寄せられた支援金のおかげで、来年いよいよ都筑区内を中心に「つづきブックカフェ号」が走り始めます。どうぞお楽しみに~!

2018年12月1日
「CF 応援コンサート」
港北区大倉山ミエルにて



2018年10月28日
下吹越かおるさんを迎えて
「走らせよう! つづきブックカフェはじまりフォーラム」
この日、クラウドファンディングがスタート。



2018年12月2日
「CF 応援おはなし会」
北山田地区センター



おはなしは、船橋かしの本文庫と
つどおう JijiBaBa 隊のみなさん

クラウドファンディング
第一ステージ100万円は達成しました!!
引き続きみなさまのご支援をお寄せください。

このプロジェクトを実施するには「人」「もの」「場」、そして「お金」が必要です。多くの方々のお知恵とご協力でご試行実施に踏み切り、次の一歩を進めるためにクラウドファンディング(CF)に挑戦することを決めました。第一ステージ100万円はおかげさまで達成し、第二ステージ(1月15日締め切り)140万円が目標です。またちょっとボランティアも募集中です。詳しくは、ローカルグッドヨコハマをご覧ください。

LOCAL GOOD
YOKOHAMA

「走らせよう! つづきブックカフェ実行委員会」
連絡先: 江幡千代子 電話: 080-3027-2211 | メール: ebachiyo.2.a@gmail.com
若杉 隆志 電話: 080-6739-1139 | メール: wakasugi@c06.itscom.net

岡本真さんよりクラウドファンディング応援メッセージいただきました。
(facebookより一部抜粋)

(略) いわゆる政令指定都市のなかでは、横浜市の公共図書館事情は、特に図書館の設置数の点では非常に見劣りがするからです。もちろん、横浜市が何もしないわけではありません。さまざまな手立てを尽くしてはいるのですが、いかにせん現状では財政的に思い切った図書館政策をとるのが困難であることは、職業柄よくわかります。

ですが、だからと言って市民も手をこまねいてはいけません。きっとそのような問題意識があればこそ、今回、このプロジェクトに立ち上がった方がいらっしゃるのだと思います。公共図書館は必ずしも公立の図書館であることを意味しません。「民」の力で公共性を発揮する図書館があってもいいですし、実際日本にもそのような民間公共の図書館は実在しています。

横浜は開港都市として常に日本に新しい風をもたらす窓の一つでした。このプロジェクトも、横浜らしい日本の図書館のありように新しい風をもたらすものへと育っていくよう願っています。そのためには大勢の方々のご助力が必要です。直接経済的にサポートしていただく以外にも、このプロジェクトをソーシャルメディアやロコミで紹介していただくだけでも心強い支援になります。共感するところがあれば、ぜひお一人おひとりにできる範囲でご助力いただければ幸いです。

岡本真さん*アカデミック・リソース・ガイド(ARG)株式会社代表

指宿図書館の指定管理を「そらまめの会」が受託し2年目に入りました。中心街から遠くへ行く図書館があることを知らない子どもたちがたくさんいます。学校図書館も書店も貧弱以前走っていた市の移動図書館も廃止されて久しい。そんな状況をなんとか変えたいと考え、「そらまめの会」として移動図書館を始めようと思いを立ちました。

ARGの岡本さん達の支援も得てクラウドファンディングによる資金集めをおこないました。指宿ではインターネットの普及率は低く、多くは直接出向き現金でいただきました。総額で170万円が寄せられました。購入・改造を行うことができました。成功の要因として地元企業の協力があつたことが大きいです。ブックカフェが動き出した地域をまわると子どもたちをとりまわく様々な現実と課題も見えてきました。駅周辺の活性化を図っている市の観光課との連携もはじまっています。

絵本を届けることで子どもたちの未来に奇り添えるよう、今後も様々な展開をはかっていきたいと思つています。 (要旨まとめ)

※下吹越かおるさん…鹿児島県指宿市立図書館館長。NPO法人本人をつなぐ「そらまめの会」理事長

つづき図書館
ファン倶楽部
メンバーの
コノゴロ
no
ココロ

- ◆都筑区の小学校の授業研究会で、学校図書館で調べることに熱中する子どもたちの姿を見た。困っている子を、学校司書も自然な形で支援していた。横浜もここまでできたと感慨深い。司書の欠員校問題は教育格差を生む。(紀)
- ◆子どもの頃、図書館はバスに乗らなければいけなかったし、家には物語の本はなかった。もっと大きくなって読書の楽しさを教えてくれたのは、叔母だ。がんで闘病中の叔母に心から感謝したい。(葉子)
- ◆ラジオNHKのミニ・ピリオパトルに出演、余命宣告された「平成時代」を偲び名著『死ぬ瞬間』を紹介した。それがきっかけで「デスクカフェ〜死をめぐる対話〜」を地元で開始、医療・福祉・哲学関係の方々との出会いがあった。(肇)
- ◆現在の図書館の課題はなぜ解決しないのか、という議論に参加した。これまで教育委員会に要望を出し続けてきたが実現しない。要望ではなく、主催者である市民の力不足だと言われて、頭をガンと殴られた気がした。(福)
- ◆ヒトリズカという花がある。山でひっそり咲く、大きな葉に見合わず小さな花。大きな空間にたった一人、こうありたいと思ひ覚えた名だ。しかし現実には小さな空間・観念に、ぎっしりと人の関心・協力が要る。(紗弥佳)
- ◆行楽の秋、皆さんはお弁当に何が入ってほしいですか?何が入ってるのかな?のワクワクと、全部食べてくれたかしら?のドキドキ。お弁当は人をつなぎ、思い出を作るものかな。(吉村)
- ◆クラウドファンディングを始めてから1日1日が早く過ぎる、特になにをしているというわけではないのに。通信が出る頃は第1ステージの最終盤。第2ステージへ行けるか?ドキドキ。みなさまご支援を!(わ)
- ◆「おすわりやすすどっせ!」(童心社)京都のわらべ歌紙芝居!歌いながら遊び方も楽しいよ。中川ひろたかさんと創った「まんまちゃんボールがホン!」中川さん「絵本の王道を行く絵本だ〜!」ってよ!(長野ヒデ子)
- ◆ブックカフェ号に積むのは当面は我がふわり文庫の本たち。先日大倉山「ミエル」の応援コンサートへ。オレンジボーイの前は親子連れが絵本を読みふけり、カフェからはアルトサックスの音!ああ、絵本たちも至福ね!(エバ)

東京・横浜ドイツ学園
図書室見学会のご案内

このチャンス逃すな!
日時:2019年1月18日
(金)9時30分~11時
集合:「仲町台駅」改札口、
9時15分
申込み:若杉隆志
携帯:080-6739-1139
Mail:
wakasugi@c06.itscom.net

「本を読む人」シリーズ
第1回



右の次男が生まれた時の話を、長野ヒデ子さんが取材してくださり、のちの『おとうさんがおとうさんになった日』に生かされました。小幡葵
★今号から、本を読んでいる人々の情景にスポットを当てた写真を連載します。

つづき図書館
ファン倶楽部
通信 vol.50



2018・晩秋

特集：つづきブックカフェ

- 発行：つづき図書館ファン倶楽部
 - 住所：横浜市都筑区茅ヶ崎南 2-18-7-503 (若杉)
mailto:wakasugi@c06.itscom.net/
ホームページ：tsuzuki.libraryfun.net/
 - 年会費：一口 1,000 円
 - 定例会：月一回
- つづき図書館ファン倶楽部は
2000年3月都筑区制5周年記念として都筑図書館がシン
ポジウムを開催。参加した区民サポーターが有志で図書
館の価値を広める目的で結成しました。

さて、18区に図書館のある横浜では、その地域の皆様と協働して、地域性を生かした運営が求められています。都筑図書館は、つづき図書館ファン倶楽部やつづきこ読書応援団をはじめ、多くの皆様と連携して運営を進めていることが特徴だと思えます。

ネット上で本を読むことができた、通販で本を購入できたりと、本を取り巻く社会状況はめまぐるしい勢いで変化しています。が、引き続き都筑図書館に地域に根差した運営を進めていきたいと思います。

私と図書館
都筑区長 中野 創

私がまだ20歳代で都市計画局という部署に在籍時、課の職総出でまちづくり関係の圖書を編集執筆しました。1990年の発刊後何十年もたちてから、横



浜中央図書館でその本を見つけた時、とても嬉しかったことが図書館にまつわる思い出として、まず頭に浮かびました。

また、相当昔になりますが、図書館の利用者としては、受験勉強で県立図書館に通っていたことも思い出されます。理系少年であった私は、あまり文学に興味を示さず、文学好きの母親を落胆させてきたかもしれません。が、「一点と線」といった松本清張の推理小説や、司馬遼太郎の「功名が辻」といった歴史小説を若い頃に読んでいた記憶があります。



都筑図書館より

都筑図書館〒224-0032 市内都筑区茅ヶ崎中央 32-1 TEL: 948-2424 FAX: 948-2432

「都筑区の区の歴史がまとまっている本はありますか？」と都筑図書館のカウンターでよくお問い合わせを受けます。2018年現在、いわゆる「都筑区史」はまだ都筑区にはなく、2014年に刊行された『都筑区制20周年記念誌 未来につなぐ 笑顔のつづき』都筑区制20周年記念誌編集会議／編（都筑区制20周年事業推進委員会）や『都筑区制20周年記念資料集 未来につなぐ 笑顔のつづき』横浜市都筑区役所／〔編〕（国際総合企画横浜）、あるいは分区以前に発行された港北区史や緑区史をご紹介します。

郷土に関心の高い方も多く、区史が有望されている中、都筑区では、2019年の区制25周年に向けて、都筑区史『図説 都筑の歴史』の編さんを行っています。そして、都筑区役所と横浜市歴史博物館、都筑図書館は連携し、「刊行イベント」として編さん委員の方を講師とした講演会や関連資料展示を開催しています。第一弾の原始・古代からスタートし、中世、近代と続いてきました。取り上げられる時代が現代に近づき、講演会に参加する方も講演をより身近なものとして聞かれているようです。

2019年2月23日(土)には、いよいよ現代の都筑として講演会が開催されます。港北ニュータウンはどのようにとけられるのでしょうか？1月下旬から受け付けを開始する予定です。詳細は広報よこはま都筑区版1月号や図書館ホームページ等でぜひチェックしてください！



【写真】2018年9月29日に行われた講演会「明治維新以後の都筑～都役所と村役場・川和の菊・農業・横浜市編入～」(相澤雅雄氏)と図書館での展示から

都筑図書館司書のおススメ本

大人向けの本②

『日本文学全集 05 源氏物語』池澤夏樹／個人編集

河出書房新社(2018年)

みなさんは、古典や名作と言ったどのような印象をお持ちでしょうか？私見ですが、時代を超えて読み継がれてきている素晴らしい作品という印象の一方で、時代が古くなればなるほどなんだか難しそうで読みづらいという印象もあると思います。そんな古典・名作を読んでみたいけど、なかなか手が出ないという方に、お勧めしたいのが今回ご紹介する「源氏物語」を含む池澤夏樹個人編集『日本文学全集』シリーズです。このシリーズは作家で詩人でもある池澤夏樹が、「世界文学の中の日本文学」という位置づけで今こそ読みたい古典・名作を選んでいきます。

何よりの特徴は、川上未映子、森見登美彦、川上弘美、中島京子、三浦しをん、内田樹など、今をときめく作家達により、古典・名作が新しく現代語訳されているという点です。「源氏物語」は直木賞作家の角田光代による新訳です。最初は現代の作家が訳したらどうなるのだろうという興味から読み始めたのですが、読んでみると「源氏物語」の持つ雅やかな雰囲気はそのままに、とてもさりとした読み口ですごく読みやすく楽しめました。11月には中巻が出て、まだ積読状態ですが読むのが今から楽しみです。寒くなってきて、外に出るのが億劫になる今の季節こそ、暖かい部屋でゆったりと、新しくなった日本文学の古典・名作に浸ってみるというのはいかがでしょうか。(小林由以子)



子ども向けの本②

『火曜日のごちそうはヒキガエル』

ラッセル・エリクソン／作 ローレンス・フィオリノ

絵 佐藤涼子／訳 評論社

この物語は1974年に出された。(邦訳は1982年)初めて読んだ時印象的だったのは、食べる者と食べられる者が仲良くお茶を飲みながら談笑するシーンかも知れない。一週間後には、食べられてしまう運命なのに、いつもどおりお茶を飲む、陽気で、無鉄砲で、勇気もあり、ないのは翼だけというこの愛すべきヒキガエル！冒険ってこじやなくっちゃ。最初から最後まで、はらはらどきどきわくわくがつまんでいて、しかも読み終えたあとに、なにか大切なことを教えてもらった気がした。

この本が日に焼けて、背のタイトルが薄れた2008年、改訳新版が出版され、新しい装丁で私たちはまた、このヒキガエルの兄弟に出会えた。年月を経ても変わらない挿画もすてきで、主人公達が生き生きと動きだすのを助けているようだ。少し懐かしい、楽しい世界に連れて行ってくれる。

余談ながら、私はカエル(主にアマガエル)の鳴き声を聞きながら育った。降るような鳴き声は、小川の流れる音と共に、ただただ懐かしい思い出となっている。(鈴木純子)



ファン倶楽部メンバーのおススメ本

『私たち図書館やってます！ 指定管理者制度の波を越えて』NPO法人本と人とをつなぐ「そらまめの会」

編著 2011年 長く低迷していた指宿図書館の指定管理者となった「そらまめの会」による4年間の実践記録。街の人に受け入れられる図書館づくりをめざすスタッフたちの息遣いが伝わってきます。続編を期待したい。(若杉)



『すべての見えない光』アンソニー・ドーア 作 藤井光 訳 新潮社

第2次世界大戦末期、ドイツの孤児の少年ヴェルナーとフランスの盲目の少女マリーが出会うまでが書かれている。ナチスの少年兵としてヴェルナーが進んでいくページとマリーがパリからサン・マロの隠れ家へ移っていくページと交互に書かれている。ヴェルナーは拾ったラジオで遊んでいるうちに優秀さを見込まれてナチスに徴用されていく。マリーは博物館勤務の父が作ったドールハウスを指で触って周りの世界を知り、点字で『海底2万里』を読む。戦争の影響を受けずにはいられない人々に心が痛む。(中村)

『43回の殺意 川崎中1男子生徒殺害事件の深層』石井光太・著 双葉社 2017.12刊

2015年2月25日未明、寒風吹きすさぶ多摩川の河川敷で、13歳の少年の遺体が全裸で発見された。彼の体は、首まわりを中心に43か所もカッターで切り裂かれていた。いまだ悲惨な記憶を呼び起す、この衝撃の事件がなぜ起こってしまったのか。遺族のみならず加害少年の関係者等にも丁寧な取材を行い、その深層に迫る。読後に浮かび上がってくるのは、荒んだ家族関係、犯人の人権擁護への偏重、遺族への理由なき非難など、現代社会のやりきれない病理状況。命の重さを改めて噛みしめるために、ぜひ一読してほしい。(坪内)



編集後記…人への深い思いやり。そこに共感してもらえたとき、つづきブックカフェは成功します。今回の特集、お見逃しなく！(原田)